

〈研究ノート〉

1893年シカゴ万国宗教会議における 日本仏教代表 釈宗演の演説 ——「近代仏教」伝播の観点から——

那須理香

(国際基督教大学大学院博士後期課程)

【キーワード】 シカゴ万国宗教会議、近代仏教、釈宗演、
ポール・ケーラス、鈴木大拙

はじめに

日本仏教の世界伝播において、1960年代のアメリカ禅ブームは海外では良く知られていることである。「世界の禅者」と言われる鈴木大拙のZENに関する英文著作等に端を発した社会現象である。しかしそれ以前にも、近代アメリカに日本仏教が受け入れられた歴史的な出来事があった。それがシカゴ万国宗教会議である。鈴木大拙の禅の師であった釈宗演が日本仏教の代表としてシカゴ万国宗教会議で演説をすることになり、鈴木は師の演説の英訳を引き受けた。これが、鈴木が世界へ向けてZENを発信する最初の契機となったと言う経緯がある。釈はこの演説の中で伝統仏教から脱却し、近代社会に合致した新しい普遍宗教としての仏教の可能性を提示することを試みた。最近の仏教研究の分野では、19世紀以降の近代社会におけるこの新しい仏教革新運動のながれを「近代仏教」と定義し、研究概念として定着しつつある。¹

本論では、アメリカ宗教史上一つの転換点と捉えられているシカゴ万国宗教会議で発表された釈宗演の演説をふりかえってみたい。²この会議の開催は、キリスト教以外にも真理を体現する宗教としての価値を認め得るものがあることをアメリカ社会に示し、宗教相対主義の概念を生み出すなどの役割を果たした。³またそこで発表された日本仏教代表の演説は、大乘仏教を基盤とする明治日本の「近代仏教」をアメリカ社会に初めて提示したという意義が認められるからである。シカゴ万国宗教会議の開催の概要をふまえ、日本仏教代表の一人、臨済宗円覚寺管長 釈宗演の演説の分析を試みる。

1 末木文美士「伝統と近代」『ブッタの変貌－交錯する近代仏教－』京都：法蔵館、2014年、pp.322-323参照。末木はドナルド・ロベスの『近代仏教－初心者のための読本』(2002年)をあげ、「近代仏教」が19世紀後半から20世紀にかけての世界史的な現象であることを明らかにした点を評価している。19世紀後半から、西洋の帝国主義を背景としたキリスト教宣教の脅威に対抗するために、アジアの仏教者たちが自らの仏教をグローバルな視点で位置づけ、近代的な意味づけを行なうようになった。それを「近代仏教」として、アジア全体にかかわる仏教革新運動ととらえたのである。

2 アメリカ宗教史研究家の Martin E. Marty はその著書 *Modern American Religion* (1986) の中で、20世紀アメリカ宗教史を1893年から始めている。その理由の一つとしてこの年にシカゴ万国宗教会議が開かれたことをあげ、この会議がアメリカ宗教史の大きな転換点であったことを示唆している。pp.17-24

3 Richard Hughes Seager, *The World's Parliament of Religions: The East/West Encounter, Chicago, 1893*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1995, p.144.

第一章 シカゴ万国宗教会議

1. 開催の意義および会議の概要

シカゴ万国宗教会議は、クリストファー・コロンブスの「新大陸発見」400周年を記念して開かれたコロンビア万国博覧会に併設する会議の一つとして1893年9月11日から27日までの17日間開催された。コロンビア万国博覧会は、近代化をとげたアメリカの経済発展を世界に示す場として物質的豊かさを誇るものであった。しかしそれと同時に経済優先、物質主義からくる人間性の喪失という側面についても問題提起する場として「物ではなくて人間、物質ではなくて心」という開催モットーを掲げていた。⁴

当時のアメリカ社会は、マーク・トウェインらによって名付けられた「金箔の時代」と呼ばれる金^{かね}を中心とする物質主義がはびこっていた。⁵ 科学技術の進歩により貨幣経済が浸透、人々は消費文化を享受するとともにアメリカ建国以来のピューリタンの労働規範が顧みられなくなっていた。金の魔力に魅了された人々は物品購入を精神救済の手立てとしてとらえるようになり、神への信仰より現世的な欲望を満たすことを優先するようになったという。⁶ すなわち貨幣経済における消費社会において、道徳社会倫理の規範としてのキリスト教の役割はその機能を停止するという状況に陥ってしまったのである。

またチャールズ・ダーウィンの進化論に基づく近代科学主義も、キリスト教の弱体化を招く結果をもたらした。キリスト教では神による天地創造が世界の始まりとして、信仰の礎となってきた。しかし進化論では、神による天地創造を否定、人類も自然の摂理に従って生存競争を繰り返すことによって進化したと考える。この説は、敬虔なキリスト教者たちを動揺させるとともに、科学の信奉者によるキリスト教批判を促進する結果をもたらした。キリスト教は絶対的規範としての地位を失い、国民は精神の拠りどころとしての宗教を失う不安にさらされてしまったのである。

このような社会背景のもと、アメリカのキリスト教界はシカゴ万国宗教会議をキリスト教の威信回復のための絶好の機会としてその開催を推進した。万国宗教会議の議長として選出されたジョン・ヘンリー・バローズ（シカゴ第一長老教会の牧師）による開会式の挨拶にその意気込みがみられる。

キリスト教界は、この宗教会議を真実と愛を照らし出す聖火として誇りを持って掲げよう。20世紀の明けの明星であることを証明しよう。アメリカがキリスト教国であることは、真に高潔な意味を持つものである。… 我々の宗教がほかに勝るものであることは、一般に受け入れられ、認められている。⁷

4 Jackson Lears, *Rebirth of a Nation: The Making of Modern America, 1877-1920*. New York: Harper Perennial, 2009, p.167

5 Lears, 2009, p.53

6 同上

7 Richard Hughes Seager, *The Dawn of Religious Pluralism: Voices from the World's Parliament of Religions, 1893*. La Salle, Illinois: Open Court Publishing Company, 1993, p.25 (筆者による和訳)

バローズはキリスト教至上主義的立場から、この会議がアメリカにおけるキリスト教の威信を再び内外に知らしめる機会ととらえていた。

この会議の参加国及び参加宗教の多様性を見ると、シカゴ万国宗教会議が世界規模の一大宗教イベントであったことがわかる。

参加国：イギリス、スコットランド、スウェーデン、スイス、フランス、ドイツ、ロシア、トルコ、ギリシャ、エジプト、シリア、インド、日本、中国、セイロン（現スリランカ）、ニュージーランド、ブラジル、カナダ、アメリカ合衆国

参加宗教：有神論、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、仏教、道教、儒教、神道、ゾロアスター教、ローマ・カトリック、ギリシャ正教、プロテスタントの諸宗派⁸

西欧諸国およびアジアの国々から主だった宗教の代表団が参加し、この会議に対する期待の高さがうかがえる。

2. 日本仏教代表団

日本仏教の代表団は次の通りである。

積宗演：臨済宗円覚寺管長

蘆津實全：天台宗

土宜法龍：真言宗高野山大学林長

八淵蟠龍：浄土真宗西本願寺派

野口善四郎：通訳⁹

日本の仏教界では、シカゴ万国宗教会議に参加の招待を受けていたものの、この会議がキリスト教の拡張を図る野心を反映したものだとして参加を退ける意見もあった。しかし積宗演と蘆津實全は、会議参加が日本仏教を西欧世界に広めるチャンスになるとの考えから積極的な参加を呼び掛け、実現することとなった。¹⁰

日本の仏教界がシカゴ万国宗教会議に代表団を送る決意を促した背景には、当時の明治政府の宗教政策によって仏教が壊滅的な打撃を受けたということがあげられる。明治維新後、神道が唯一の国家宗教として認められ、1868年に神仏分離令が發布されると、廃仏毀釈運動がおこった。これにより地域差はあるものの、多くの寺が破壊され仏像が取り払われたりして、江戸期に地域の中心として機能していた寺¹¹がその役割を奪われ、仏教衰退の危機にみまわれていた。また明治のインテリをはじめとする上流階層は、政府の富国強兵策を背景に西洋近代科学を基盤とする物質文明を受け入れると共に、日本の宗教的基盤であった仏教を否定するようになる者も多く出ていた。¹²このような状況を打開するため、日本の仏教各

8 Seager, 1993, pp.19-20

9 森孝一、「シカゴ万国宗教会議：1893年」『同志社アメリカ研究 26』、1990年、p.6

10 鈴木範久『明治宗教思潮の研究』東京：東京大学出版会、1979年、pp.212-216

11 仏教による民衆教化と檀家の戸籍管理のために幕府は「寺壇制度」を施行していた。末木文美士『日本宗教史』東京：岩波書店、2006年、p.152参照。

12 鈴木大拙『新宗教論』京都：貝葉書院、1896年、『鈴木大拙全集 第23巻』東京：岩波書店1969年所収、pp.8-12参照。

派は旧弊を脱した新しい仏教の構築を模索し始めていたのである。

さらにこの時期他のアジア諸国においても、西欧帝国主義の植民地政策からキリスト教の宣教が強固に行われ、在来の仏教が迫害されていた。インド、セイロン、ビルマなどを訪問した日本人仏教者たちは、「汎アジア」的な仏教の危機を感じて、キリスト教に対抗し得る「近代仏教」を構築する必要を痛感していたという。¹³そして、その新しい仏教を世界に提示する場としてシカゴ万国宗教会議が絶好の機会であると、釈宗演や蘆津實全らは考えたのである。

第二章 シカゴ万国宗教会議における釈宗演の演説

シカゴ万国宗教会議に、日本仏教代表の一人として参加した臨済宗円覚寺管長釈宗演とはどのような人物であったのか。釈の演説によって提示された「近代仏教」とはどのようなものであったのか。そして釈の演説への現代の研究者の批判及び反論をあげ、釈の演説の果たした役割を考察したい。

1. 釈宗演 (1860-1918) の略歴

釈宗演は、伝統的な日本仏教の修行を積んだ禅僧でありながらも近代化の波に立ち向かった稀有の宗教者であった。釈は1860年（安政6年）幕末の若狭国（現福井県）に生まれ、12歳で京都妙心寺で得度、18歳で鎌倉円覚寺の今北洪川の法嗣（弟子）となる。禅修行に励むかたわら慶応義塾で福沢諭吉に英語と洋学を学び、ここで西洋科学や世界情勢などの知識を得ることにより、仏教近代化への道筋を与えられたとすることができる。1887年（明治20年）春より三年間セイロンに渡り、パーリ語とセイロンの上座部仏教¹⁴を学んだ。1892年34歳で円覚寺派管長に就任、翌年シカゴ万国宗教会議に出席したのである。その後も円覚寺で初めてアメリカ人の禅指導を行い、日露戦争では従軍布教師となり、1906年には再び渡米、鈴木大拙を伴ってアメリカで禅指導を行うなど、欧米への禅布教を積極的におこなった。¹⁵

釈が1887年（27歳）から1889年（29歳）の三年間セイロンに滞在し、当時イギリスの植民地となっていた現地の仏教事情に精通した経験は、釈がキリスト教の脅威に対抗しうる宗教として「近代仏教」を構築する上で大きな影響を与えたと考えられる。釈は、慶応義塾の恩師福沢諭吉の勧めで「禅の修行の完成、サンスクリットとパーリ語の学習、セイロン仏教の現状調査」などの目的で渡航することになった。¹⁶その滞在中に出会ったのが、アメリカの神智学者ヘンリー・スティール・オルコットがまとめた『仏教問答』であり、彼が中心に

13 ジャファイ、リチャード「釈尊を探して—近代日本仏教の誕生と世界旅行」『思想』2002.11. No.943, pp.65-66, p.82参照。ジャファイはこの論文で「汎アジアの仏教の一群」や「統一的仏教の創造」について言及し、日本の「仏教的国際主義」が後の日本の「仏教的帝国主義」の土台となったという見解を示している。

14 上座部仏教とは南西アジアを中心とした地域に広まった仏教で、出家者だけが悟りを開くことができると考える。在家の仏教者でも悟ることができるとした東アジアの大乗仏教と対照的な仏教の宗派である。

15 井上禪定『禅とZENを伝えた明治の高僧 釈宗演伝』禅文化研究所、2000年、p1

16 ジャファイ、2002年、p.74

なって布教していた「プロテスタント仏教」であった。¹⁷

『仏教問答』とは、キリスト教の宣教において入門者に問答形式で教理を教える『カテキズム / 教理問答』を模してオルコットが考案、「釈尊を中心とした合理的で科学的な宗教として仏教を提示した」ものである。¹⁸つまり、仏教をキリスト教プロテスタントの教義に照らし合わせ、西洋近代合理主義的観点からの仏教理解を基礎として、新しい仏教を構築したのである。ここに「近代仏教」の原型が生まれたとすることができる。釈宗演は、オルコットの『仏教問答』の一部を書き写すことで英語を修練したといわれることから、西洋の価値観によって翻案しなおされた「プロテスタント仏教」に熟知していたと考えられる。¹⁹この経験が釈の「近代仏教」の概念を形成する基盤となり、シカゴ万国宗教会議における釈の演説に反映されたと推測できる。²⁰

2. シカゴ万国宗教会議での演説

釈宗演の演説の日本語題は「仏教の要旨并に因果法^{ならび}」であり、鈴木大拙の英訳では‘The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha’となっている。この英訳の演題に「近代仏教」の特徴となる二つの点が集約されていると考える。それは「因果法」すなわち、近代科学の基礎となる「原因と結果の法則」からなる合理主義的観点と、仏教の教えが仏陀一人によって開かれたものにとらえる「一神教」的側面である。これら二点を強調してまとめられた釈宗演の演説は、日本の大乘仏教を近代的にとらえなおし、キリスト教を基盤としてきた西洋の人々にも受け入れやすいものとして提供したと考えられる。この2つの観点から釈の演説を検証していく。ここではデヴィッド・マクマハンが「仏教モダニズム」の分析で提示した「近代仏教」の概念をとりあげて、釈の演説が「近代仏教」構築へのアピールであったことを示したい。

マクマハンは、チャールズ・テイラーが「近代的自我と道徳性の主要な要素」として挙げた三つの領域が仏教の近代化にも適用できると考え、それらを「仏教モダニズム」の特徴としてとらえなおした。それは、①西洋的な一神教、②合理主義と科学的自然主義、③ロマン主義的表現主義である。もちろんこれらは西洋の歴史的文化的背景から想定されたものであるが、「仏教モダニズム」の展開が西洋を含め世界的な広がりであることから分析に有効であるとしてマクマハンは提案している。²¹この三点のなかで、釈の演説においては第一と第

17 ヘンリー・スティーラー・オルコットはブラヴァツキー夫人とともに1875年神智学協会を設立、仏教が真の宗教であるとして布教を推進していた。

18 ジャフィ、2002年、p.75

19 同上

20 大谷栄一は「アジアにおける「仏教と近代」『ブッタの変貌－交錯する近代仏教－』の中で、「プロテスタント仏教」の特徴として「①プロテスタント的、②キリスト教と植民地主義へのプロテスト、③伝統仏教（伝統教団）へのプロテストという三重のプロテストを認めることができる」と分析している。これは、日本及びアジアの国々の仏教の置かれた状況から発生した態度であり、釈の「近代仏教」にもあてはめることができる。神仏分離や廃仏毀釈によって疲弊し壊滅的な状態にあった明治日本の伝統仏教（伝統教団）にプロテスト（異議申し立て）することで、釈らは近代化した仏教を創出しようとしていた。また、明治維新後に宣教師によってもたらされたキリスト教が日本の知識層に広く受け入れられるようになり、仏教が圧迫される状況になっていたことにプロテスト（反発）し、キリスト教を超える普遍仏教としての「近代仏教」を構築する必要に迫られていたのである。

21 McMahan, David L., *The Making of Buddhist Modernism*. Oxford: Oxford University Press. 2008, p.10. 末木2014年、p.323参照

二の点について特に強く主張されていると考える。²²

釈の演説の英題 ‘The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha’ を二つの部分に分けると、マクハマンがあげた「仏教モダニズム」すなわち「近代仏教」の特徴がそれぞれに反映されていることがわかる。前半の ‘The Law of Cause and Effect’ は②「合理主義と科学的自然主義」という特徴であり、後半の ‘as Taught by Buddha’ は①「西洋的な一神教」にならった仏教の再構築の表現としてとらえられる。

‘The Law of Cause and Effect’ が示す概念について、釈は人間界の営みも自然界の事象と等しく、原因と結果の連鎖によって規定された「因果法」という自然の法則によってすべてが支配されているとし、演説では次のように「因果法」を説明する。

我々は、朝から晩まで常に楽苦、愛憎などの感情に心を乱され、あるいは野心や希望に満ち、あるいは理性や意欲の最高の興奮に突き動かされる。このように心の活動は、湧き出る水の果てしない流出のようである。外面的世界の現象が多様で驚くべきものであるように、人間の精神の内面の心境もまた然りである。このような驚くべき現象の説明を求めてみよう。宇宙はなぜ不断の流転なのか。なぜ物は変化するのか。なぜ心は不断の不安に支配されるのか。これらの問いに仏教は唯一つの回答を提供する。それは因果の法則である。・・・ 肉体の健康、物質的な富、素晴らしい才能、不自然な苦しみなどはすべて [仏教の] 因果法の絶対的な表現なのである。この因果法は、宇宙のすべての粒子と人間のすべての行動を支配する。仏教の倫理を私に尋ねるならば、答えよう。仏教における倫理の根源的權威は因果法に存する。自分の将来を輝かしいものにしたいのなら、親切で公正で慈悲深く正直でありなさい。不誠実で残忍で薄情な行為は、汝をみじめな墮落へと運命づけるであろう。²³

人間の内面に起こるあらゆる精神活動は、外面的世界の現象と同じように宇宙の原理である「因果法」によって規定され、変化し続けているものであると説明されている。また現時点の心の状態は以前の行為の結果として生まれ出たものであり、将来の希望は現時点の努力によって保障されるということである。

またこの「因果法」は、次の五つの特質を持つものされる。

- i 複雑な様相を持つ縁起 (the complex nature of cause)
- ii 縁起律の無限の連鎖 (an endless progression of the causal law)
- iii 三世 (過去・現在・未来) における縁起律 (the causal law, in terms of the three worlds: past, present, and future)

22 テイラーのあげた第三の特徴である「ロマン主義的表現主義」をこの分析で外す理由は、「ロマン主義的表現主義」の定義が「自然や人間の霊的精神の深みに隠された神聖さや神秘を再確認する運動」とされ、これに照らし合わせると西洋における仏教の受容がそのまま「ロマン主義的表現主義」の運動にあたるからである。シカゴ万国宗教会議における釈の演説を始め、その後起きた仏教伝播の過程がすべて「ロマン主義的表現主義」を推進する運動に含まれる。釈の演説もおのずからこのテイラーの第三の特徴を満たしていると考えられる。

23 Seager, 1993, p.406, p.409 (筆者による和訳、[] 内筆者加筆)

- iv 自己の責任において生ずる因果 (self-formation of cause and effect)
- v 自然法としての因果律 (cause and effect as the law of nature)

釈によると仏教の「因果法」は、過去現在未来における際限のない連鎖のなかで、我々自身の行為がすべての事象の原因になるという複雑な法則であるとされる。そしてこれは仏陀の意志からも人間の意志からも独立した自然の法であり、始まりも終わりもなく永遠に存在するものであるという。²⁴ 釈の説く「因果法」は、すべての事象が原因と結果の連鎖によって導き出され、世界を構成すると捉えている。これは近代科学の基本概念である原因と結果の法則が自然を支配するととらえる考え方に合致し、マクマハンが提案した「近代仏教」の特徴である②「合理主義と科学的自然主義」に相当すると言える。またこれは西洋近代科学の基礎となっていたダーウィンの進化論とも共通する世界観である。釈はこの演説で、「因果法」に焦点をあてて説明することで、仏教が西洋近代科学の概念に齟齬のない近代宗教であることを印象付けたのである。

釈の演説の英題後半部分の 'as Taught by Buddha' であるが、これは「因果法」が、仏陀自身が説いた教えであることを強調している。江戸期までの伝統日本仏教では、菩薩や如来信仰、各宗派の宗祖信仰が広まり、それぞれ別の仏教経典を唱えるなど、多神教的様相を示していた。また、日本の大乘仏教発展の歴史のなかで、仏教の始祖である仏陀は信仰の対象としてさほど関心を払われていなかったという事実がある。これに反し釈の演説では仏陀を仏教信仰の中心に据え直し、原始仏教²⁵に回帰することによって「西洋の一神教」に近い宗教であることを示そうとした。

また南西アジア地域で実践されていた上座部仏教は、原始仏教に近い形の仏陀のみを信仰する仏教であるが、釈はこの地域の仏教者との団結も視野に入れて日本仏教の「一神教化」を試みようとしたようである。²⁶ さらに、近代に入って南西アジアの植民地で行われていた仏教に初めて接した西洋の研究者たちも、一神教であるキリスト教に近い上座部仏教を宗教として認めていた。これらをふまえて、釈はシカゴ万国宗教会議の西洋の聴衆に向けた演説で「因果法」が仏陀自身によって説かれた教えであることを強調したのである。

仏陀としての釈迦牟尼²⁷を中心とする仏教を構築しようとした釈の決意は、次の一節に見られる。

本尊ハ何仏ガ尤モ恰好ナルヤト云ウニ予ハ釈迦牟尼仏コソ当撰ノ本尊ナルベシト信ズ…ナントナレバ釈尊ハ吾人ノ大恩教主ニシテ即チ現劫主位ニ在ス本師ナレバナリ…且ツ釈尊ノ名ハ畜仏教国ニ備スルノミナラズ今時ハ欧米各国ニ至ルマデソノ名ヲ知ルナ

24 Seager, 1993, pp.406-408

25 原始仏教とは釈尊入滅直後に実践された仏教を指し、釈尊の教えのみを中心とする信仰であった。その後時代を経るに従い、様々な部派に分かれ釈尊以外の者が著した経典を拝むなど、仏教の多様化が進んだ。特に日本における大乘仏教の展開の中で、宗派の多様化は著しい。

26 ジャフィ、2002年、p.77

27 本稿ではここまで、仏陀を釈迦牟尼の代名詞として使用してきたが、仏陀は本来「悟った者」という意味で、釈迦牟尼以外にも多数の仏者を指す。釈迦牟尼は仏教において初めて悟りを開いた、最初にして最も尊重される仏陀である。

り他ノ諸仏ノ名ハ西洋ハ勿論東洋ノ仏教国ニテモ西南部ノ仏者ハ過去七仏ノ他其ノ名ヲ
ダニ知ラザル者多シ是又釈尊ガ今ノ二十世紀ノ文明世界ニ因縁アル本尊ナリト云ベキカ
28

すべての仏教の宗派の「本尊」として仏教の開祖である釈迦牟尼がふさわしいこと、西洋にも知られた仏陀である釈迦牟尼が二十世紀の仏教の中心となるべきことを主張している。

以上、釈の演説の英題 'The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha' をもとに、シカゴ万国宗教会議における釈の演説の狙いが、仏教の開祖である釈迦牟尼が説いた「因果法」を中心とした新しい仏教としての「近代仏教」の構築であったことをみた。

さらに、釈が演説の最後で述べたことが、「近代仏教」が普遍宗教としての特質を備えた宗教であるとする主張を強化するものとなっている。それは、仏陀が「因果法」の創造者ではなく、最初の「発見者」であったということである。仏陀は自然法としての「因果法」を発見し、「従者たちを導く徳の完成へ導くもの」であったとされている。²⁹ これに対しキリスト教では、神が万物の創造者として絶対的権威者と理解され、信仰の対象として礼拝されていた。しかし近代合理主義の下でキリスト教の創造主は、人間を含むすべての動植物が自然淘汰により進化発達したというダーウィンの進化論に合致しないとして、科学信奉者たちから敬遠されることとなった。仏教の開祖である仏陀は、創造主ではなくキリスト教の「預言者」³⁰ に近い存在として理解されている。進化論に類する原因と結果の法則からなる「因果法」を教義の中心とする仏教は、近代合理主義に即した宗教としての特質を備え、近代の普遍宗教として成立し得ることを印象付けたのである。

釈宗演はシカゴ万国宗教会議における演説によって、「近代仏教」として新たに捉えなおされた日本の大乘仏教を、シカゴの聴衆に始めて披露したといえる。

3. 釈宗演の演説に対する現代の研究者の批判

シカゴ万国宗教会議は、西洋における仏教伝播の歴史の中で「近代仏教」が初めて提示された出来事であった。その後の仏教の進展にも大きな影響を与えたこの会議は、現在の研究者による「近代仏教」研究の対象となっている。特にアメリカの仏教研究者は、釈の演説について他の日本仏教代表者の演説と引き比べ、批判を加えている。ここではケテラーとスノドグラスの研究から、釈の演説がどう受け止められたかを見てみる。

ケテラーは、釈の演説が因果応報と縁起の論理を説明し、因果の「論理的循環」が「自然の法則」であることを示したと評価している。しかし、釈を含め八淵蟠龍や土宜法龍ら日本仏教代表の演説は、英訳されると「煽り付けるだけの不敵な主張に低質化してしまった」としている。それは「キリスト教と仏教徒の類似性を作りだそうとして、19世紀のプロテスタントの宗教言説を部分的に取り込んだため」であるという。³¹ 確かに、釈の演説の日本語の

28 釈宗演『西南の仏教』東京：博文館、1889年、p.46、ジャフイ、2002年、p.77参照

29 Seager, 1993, p.409

30 キリスト教の預言者は、創造主である神からの啓示を人々に伝え導く者とされる。神から「十戒」を授かり、イスラエルの民をエジプトから救済したモーゼは良く知られた預言者の一人である。

31 ケテラー、ジェームス・E『邪教／殉教の明治－廃仏毀釈と近代仏教』、東京：ぺりかん社、2006年、pp.233-234

原文では仏教の専門用語を駆使して余すところなく説明しているという印象を受ける。³² これに反し、英訳の方ではほとんどを因果応報の論理の説明に費やし、かなり意識的な表現になっているように思える。³³ しかしこれは、仏教の知識のない聴衆が理解可能な内容にするために、あえてとられた方法ではないだろうか。実際、真言宗高野山大学林長の土宜法龍の「仏教」という演説の後で、聴衆の一人は通訳の野村洋三に演説の内容が全く理解できなかったと述べたという記録がある。³⁴ 聴衆にとって未知の宗教である仏教が少しでも受け入れられるようにするには、聴衆の文化的背景を考慮し、それに合わせた提示の仕方をとる必要がある。鈴木英訳はその観点から配慮されたものと考えられる。ケテラーは、釈の演説のどの部分が「19世紀のプロテスタントの宗教言説」にあたるか説明していないので、何がどのように「低質化」してしまったか判定することが出来ない。しかし、この鈴木大拙による英訳のおかげで釈の演説が聴衆に理解可能なものになり、自然の法則である「因果法」が受け入れられる結果となったと言うことはできるだろう。

スノドグラスは釈の演説を仏教的観念論の観点から批判している。伝統日本及び東アジアの大乗仏教では「仏陀」の概念を、悟りを開いた釈迦牟尼である人間としての存在にとどまらず、「宇宙の現れの根本原理」である悟りの状態を体現するすべてのものを表わすとしてしている。³⁵ 「仏陀」という言葉の意味の拡張が大乗仏教の「鍵概念」とされていた。³⁶ しかしスノドグラスによると、釈の演説はこの基本概念について説明しておらず不十分であると、次のように述べている。

仏教的観念の十全な含意は、万物の本質としてのブツダという概念を縁起の概念と結びつけることに依拠している。この概念は、シカゴ会議における釈宗演の発表論文「ブツダの説いた因果法則」の中に、極めて印象的な仕方でもて提出されている。彼が述べるところによれば、「われわれの知る世界は、心の本質において作用している因果法則の帰結である」。しかしながら、彼の説明の主な焦点は、行為の結果の動かしえない作用が、神の介入しない道徳的応報の体系をいかにしてもたすのか、という問題だった。仏教的観念論の含意がより完全に展開されたのは、他の代表者たち、蘆津、土宜、八淵らの発表論文や、会議での配布のために準備された黒田真洞の『大乗仏教大意』においてである。³⁷

32 常光浩然編、『日本仏教渡米史』東京：仏教出版局、1964年、pp.39-41参照。釈の演説の原文を以下に一部抜粋する。「(前略) わが大聖人釈迦牟尼世尊は一切種智、三世洞観の眼をもって、無量無辺の衆生が、此処に死んだり、彼処に生まれたり、各々善と悪との二習慣に従って、苦と楽との報酬を受け、行きつもどりつ、輪廻きわまりなき有様を察して、その出世五乗の道路を開拓して、もって一切衆生を導き、かの汚染の虚妄なる習慣をのがれ、この浄円満なる大帝都に到着せしめんと誓い、この世に出現されたのです。(後略)」

33 Seager, 1993, pp.406-409. 本稿 pp.6-7参照。

34 同上、p.38

35 『大乘涅槃経』に「一切衆生悉有仏性」と表わされているように、大乗仏教ではすべてのものに「仏性」が宿るという考え方が基本とされた。現代の研究ではこの「仏性」を「ブツダ性」と表わし、最初の仏陀であった釈迦牟尼との共通性を表わす表現として用いられるようになっていく。

36 スノドグラス、ジュディス・M「近代グローバル仏教への日本の貢献－世界宗教会議再考」『近代と仏教－国際シンポジウム第41集－』京都：国際日本文化研究センター、2012年、p.64

37 スノドグラス、2012年、pp.65-66

スノドグラスによれば、釈の演説のほとんどが「縁起の概念」の説明のみについやされて、これに関しては「きわめて印象的な仕方では提出されている」と評価している。しかし「仏教的観念の鍵」である「万物の本質としてのブッダという概念」は説明されておらず、他の日本仏教代表者の演説で補われるという形でしか提示されなかったとしている。³⁸つまり、釈の演説は仏教的観念論の重要な部分を省いた説明でしかなかったと批判している。しかしながらこれに対する反証として、スノドグラス自身の次のような説明から推論し、説明することができる。

シカゴ会議で提出された「ブッダ」概念は、今では極めてよく知られた概念だが、当時の西洋における「ブッダ」理解からはかけ離れたものだった。実際、聴衆に含まれる正統的なキリスト教徒にとって、そこで示された観念は単に考えられないものだった。³⁹

当時の西洋の仏教研究では、上座部仏教しか知られていなかったため「ブッダ」はすなわち唯一の教主的存在であり、預言者のような人間であると理解されていた。これに反して、人間を含むあらゆるものが「ブッダ」に類する価値を持つと解釈した大乘仏教の教義は理解不可能と受け止められても不思議はない。また、キリスト教を基盤とする西洋の宗教概念でも、唯一無二の神の「神性」は全能の神にのみ備わるものであり、人間を含む万物に「神性」に類する「ブッダ性」が共有されているとする仏教観念は邪教的と受け止められても仕方ないだろう。この二点に対する考慮から、釈は演説で大乘の「ブッダ」性の概念を提示せず、議論が起ることをあえて避けたのではないだろうか。不可解な宗教概念をつきつけられた聴衆の、仏教そのものに対する拒否反応を回避するというねらいから、「縁起の概念」に特化した演説を構成したと解釈することができる。このことによって釈は、他の日本仏教代表の演説に比べて聴衆の理解と賛同を得ることができたのである。

以上、ケテラーとスノドグラスの二人の現代の仏教研究者は、釈の演説の英訳が「低質化」した表現になっていること、「ブッダ性の概念」について説明が不十分であることをあげて批判している。しかし両者は、釈の演説が「因果法 / 縁起の概念」という自然の法則が「近代仏教」の基盤であることをシカゴの聴衆に印象付けた点については評価している。釈の演説の目的が、近代科学の合理性に合致した仏教を西欧社会に提示することだったとすれば、この目的は達成されたと言うことができよう。

シカゴ万国宗教会議に出席し演説した釈宗演自身の評価は、次の一節に語られている。

特に吾等が今回の大会に於いて、少なくとも内外人の注意を惹き起こせしものは、・・・
 仏教が如何なる程度まで日本国民の精神を支配して、古今の国主に関係を及ぼしたること。
 仏教は世界宗教にして而も現在の科学哲学と密合せること。大乘仏教は非仏説なりと云ふの妄想を打破せしこと。・・・等なりとす。⁴⁰

38 同上

39 スノドグラス、2012年、p.66

40 釈宗演『万国宗教大会一覽』鴻盟社、1893年、p.10。鈴木範久、1979年、p.223参照

仏教が、日本社会に深く浸透し精神基盤になっていること、近代の科学哲学に合致した世界宗教であること等についてシカゴの聴衆に印象付けることができたと評価している。また、日本の大乘仏教を認めていなかった西洋の仏教研究者に上座部仏教以外の仏教の真価を伝える使命をも全うしたととらえている。釈にとって、シカゴ万国宗教会議における自分の演説とそれに続く大乘仏教の受容は成功裏に終わったという実感があったようだ。

4. 釈宗演の演説がアメリカ仏教史に与えた影響

釈宗演はシカゴ万国宗教会議の後、ポール・ケーラス(1852-1919)の招きを受けて一週間ほどシカゴにとどまったという。⁴¹ ポール・ケーラスは近代社会における科学と宗教の整合性を追究したアメリカ宗教啓蒙者である。シカゴ万国宗教会議で仏教代表の釈宗演らの演説を聞き、仏教こそが近代科学に適合する宗教であるとして高く評価し、釈とともに仏教啓蒙活動を開始、鈴木大拙を助手として自身のオープン・コート社に呼び寄せ、アメリカ仏教史に大きな影響を与えた人物である。シカゴ万国宗教会議で釈らが代表する日本の「近代仏教」に出会ったことが、ケーラスによる仏教啓蒙運動をアメリカ社会に進展させる契機となった。

ポール・ケーラスはドイツで牧師の父のもとに生まれ、同じ職業を目指してチュービンゲン大学で博士号を取得したが、牧師にはならず1884年にアメリカに渡った。その時代の知識層の例にもれず、彼もダーウィンの進化論に触発され、キリスト教の神による天地創造論が科学に矛盾するとして、「宗教と科学の統一」が実現可能な宗教を模索していた。⁴²

シカゴ万国宗教会議翌年の1894年、ケーラスは「業と涅槃」『カルマ』⁴³『仏陀の福音』などの著作を相次いで発表、近代科学に適合する宗教として仏教を広める啓蒙活動を開始した。仏教の基本概念を解説した『仏陀の福音』は、当時最も権威のある解説書として西洋東洋を問わず受け入れられ、ケーラスの存命中でも13の版を重ねたという。中国語、マレー語、ウルドゥー語、タミール語、ベンガル語、シャム語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、スペイン語など多数の言語にも翻訳された。⁴⁴ 日本語には鈴木大拙が翻訳し、『仏陀の福音』として1895年に出版された。これらケーラスの業績は、釈の演説が西洋に受け入れられるべく構築を試みた「近代仏教」の伝播に成功したひとつの証拠と考えることが出来る。シカゴ万国宗教会議における釈宗演の演説は、宗教と科学の共存を理念としていたポール・ケーラスに新しい普遍宗教としての「近代仏教」の可能性を印象付け、仏教啓蒙運動を開始させるという結果をもたらした。「近代仏教」はケーラスを通じて西洋の仏教研究者以外の人々にも広く知られ、理解されることとなった。

鈴木大拙の西欧へ向けたZEN布教の業績が、シカゴ万国宗教会議から始まったことも釈

41 Larry A. Fader, "Zen in the West: Historical Implications of the 1893 Parliament of Religions," *The Eastern Buddhist*, 15:1(1982), p.132

42 ケネス・タナカ『アメリカ仏教－仏教も変わる、アメリカも変わる』東京：武蔵野大学出版会、2010年、pp.106-107

43 『カルマ』は1896年鈴木大拙によって和訳され『因果の小車』という題で日本でも出版された。これを読んだ芥川龍之介は、『カルマ』の一部の逸話をもとに1918年『蜘蛛の糸』を創作、広く知られるようになった。アメリカの仏教研究者の著した物語が、鈴木大拙を介して日本に逆輸入され広まるという珍しい例である。タナカ、2010年、p.107参照。

44 Fader, 1982, p.141

宗演がアメリカ仏教史に与えた影響の一つと考えられる。釈の演説「仏教の要旨并に因果法」を英訳し、西洋の聴衆に受け入れやすい表現によって、釈の「近代仏教」提示に貢献したことは上述のとおりである。その後、釈の紹介でポール・ケーラスの主宰する出版社であるシカゴ近郊のオープン・コート社で働き、仏典や仏教解説書の翻訳によってケーラスの仏教啓蒙活動を支えた。シカゴ滞在後期には初の英語による大乘仏教解説書 *Outlines of Mahayana Buddhism* (1907) を出版、本格的な大乘仏教の研究書として欧米の研究者に広く読まれ、「世界の禪者」としての鈴木大拙の禪布教が始まったのである。1960年代のZENブームまでの間に、鈴木は二回（1936年：昭和11年、1949年～1958年：昭和24年～昭和33年）欧米各地で講義講演を行い日本の禪を広めた。⁴⁵ シカゴ万国宗教会議において釈が演説をするという機会がなければ、鈴木大拙の渡米も実現せず、禪布教も違った形になっていたかもしれない。

むすび

釈宗演は、臨済宗の法主として伝統仏教を体現する存在であった。それとともに、慶応義塾で福沢諭吉のもとで西洋の科学知識やキリスト教概念を修得し、またスリランカでは植民地支配のために壊滅寸前であった上座部仏教の現状を目の当たりにし、それに立ち向かって仏教復興をめざすオルコットらのアプローチを取り入れてアジアの統合を目指すものでもあった。シカゴ万国宗教会議における演説は、釈のもくろみを見据えた仏教界のアピールを、西欧を中心とする世界に向けて放つ絶好の機会であった。鈴木大拙によって翻訳された釈の演説「仏教の要旨并に因果法」は、「近代仏教」において強調された仏陀中心の信仰という側面と、因果法という合理性をそなえた側面を印象付けることができた。

また釈宗演がシカゴ万国宗教会議で行った演説は、次の三点においてアメリカ宗教史に足跡を残すものとなったと言える。第一点は、それまでのヨーロッパにおける仏教研究により上座部仏教（小乗仏教）しか知られていなかったところに、釈の演説によって「近代仏教」としての日本の大乘仏教を初めて正式に披露したということ。第二点はシカゴ万国宗教会議においてアメリカ宗教啓蒙者のポール・ケーラスと出会うことにより、仏教経典や仏教啓蒙書の英訳を多数出版することになる契機を得たこと。そして第三点は、シカゴ万国宗教会議における釈の演説を英訳した弟子の鈴木大拙が、ポール・ケーラスを介して渡米し、アメリカ禪布教の機会がもたらされたことである。

このシカゴ万国宗教会議以前は東洋の風変わりな異教としか受けとめられていなかった仏教が、近代合理主義にかなう宗教として認められるようになったことへの釈宗演の果たした役割は大きいと言える。

<参考文献>

- 井上禪定『禪とZENを伝えた明治の高僧 釈宗演伝』京都：禪文化研究所、2000年
 大谷栄一「アジアにおける「仏教と近代」」『ブッタの変貌－交錯する近代仏教－』京都：法蔵館、2014年

45 鈴木大拙『鈴木大拙全集－増補新版 第40巻』岩波書店、2003年、pp.113-249

- ケテラー、ジェームス・E『邪教/殉教の明治－廃仏毀釈と近代仏教』、東京：ぺりかん社、2006年
- 釈宗演『西南の仏教』東京：博文館、1889年
 _____『万国宗教大会一覽』鴻盟社、1893年
- ジャファイ、リチャード「釈尊を探して－近代日本仏教の誕生と世界旅行」『思想』2002.11. No.943
- 末木文美士『日本宗教史』東京：岩波書店、2006年
 _____「伝統と近代」『ブツタの変貌－交錯する近代仏教－』京都：法蔵館、2014年
- 鈴木大拙『仏陀の福音』東京：佐藤茂信、1895年、1901年に森江書店より再版、『鈴木大拙全集 第25巻』東京：岩波書店、1970年所収
 _____『新宗教論』京都：貝葉書院、1896年、『鈴木大拙全集 第23巻』東京：岩波書店、1969年所収
 _____『因果の小車』東京：長谷川武次郎、1901年
 _____『鈴木大拙全集－増補新版 第40巻』東京：岩波書店、2003年
- スノドグラス、ジュディス・M「近代グローバル仏教への日本の貢献－世界宗教会議再考」『近代と仏教－国際シンポジウム第41集－』京都：国際日本文化研究センター、2012年
- タナカ、ケネス『アメリカ仏教－仏教も変わる、アメリカも変わる』東京：武蔵野大学出版会、2010年
- 常光浩然編、『日本仏教渡米史』東京：仏教出版局、1964年
- 森孝一、「シカゴ万国宗教会議：1893年」『同志社アメリカ研究 26』、1990年
- Carus, Paul. “Karma and Nirvana: Are the Buddhist Doctrines Nihilistic?” in *Monist* 4:3, 1894.
 _____. *Karma: A Story of Buddhist Ethics*. Chicago: Open Court Publishing Company. 1894, reprinted in 1917.
 _____. *The Gospel of Buddha*. Chicago: Open Court Publishing Company. 1894.
- Fader, Larry A. “Zen in the West: Historical Implications of the 1893 Parliament of Religions,” *The Eastern Buddhist*, 15:1, 1982
- Lears, Jackson. *Rebirth of a Nation: The Making of Modern America, 1877-1920*. New York: Harper Perennial, 2009.
- Lopez, Donald. *Modern Buddhism: Readings for the Unenlightened*. Penguin Books, 2002.
- Marty, Martin E. *Modern American Religion Volume 1: The Irony of It All 1893-1919*, Chicago: The University of Chicago Press, 1986.
- McMahan, David L. *The Making of Buddhist Modernism*. Oxford: Oxford University Press. 2008.
- Seager, Richard Hughes. *The Dawn of Religious Pluralism: Voices from the World's Parliament of Religions, 1893*. La Salle, Illinois: Open Court Publishing Company, 1993.
 _____. *The World's Parliament of Religions: The East/West Encounter, Chicago, 1893*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1995.
- Suzuki, Daisetz T. *Outlines of Mahayana Buddhism*. London: Luzac and Company, 1907.

The 1893 World's Parliament of Religions in Chicago: From a perspective of the diffusion of 'Modern Buddhism' by Soen Shaku

Rika NASU
International Christian University, Doctoral Program

【keywords】 The 1893 World's Parliament of Religions in Chicago,
'Modern Buddhism,' Soen Shaku, Paul Carus, Daisetz T. Suzuki

The ZEN boom in the United States in 1960's is well-known as a diffusion of Japanese ZEN Buddhism caused by the influence of Daisetz T. Suzuki. There had also been a historical event before that, in which Japanese Mahayana Buddhism was accepted to the American society. That is the 1893 World's Parliament of Religions held in Chicago. Suzuki's Zen master, Soen Shaku gave a speech there and proposed "Modern Buddhism" that corresponds to modern science. With the help of Suzuki's translation of his speech, Shaku successfully introduced "Modern Buddhism" to the Western world.

Shaku's speech, entitled "The Law of Cause and Effect, as Taught by Buddha," presented Buddha's law as "the truth of the universe." "Modern Buddhism" proposed in Shaku's speech represents two of the characteristic features in McMahan's "Buddhist Modernism." They are (1) monotheism by the Buddha, and (2) rational and scientific property which deny "God, the creator."

Christian society in the United States planned the World's Parliament of Religions in Chicago to recover Christian authority, which was damaged by the degenerated social condition called the "Gilded Age," and the new scientific interpretation of religions by Darwin's theory of evolution. From about 20 countries, 12 religions were invited to the Parliament. The audience of the Parliament in Chicago was greatly impressed by the speeches of Asian representatives of Buddhism, including Shaku. They accepted Buddhism as a "Modern" religion, and some began to embrace Buddhism as their own religion. One of them was Paul Carus, a prominent figure of religious enlightenment in the United States. Carus began publishing books on Buddhism in English, and contributed to the study of Buddhism in the Western world. Carus' work is considered as the proof that Shaku's speech successfully presented 'Modern Buddhism' to the West.